

# 山口市男女共同参画センター だより

平成26年1月号

発行:山口市男女共同参画センター  
編集:山口市男女共同参画ネットワーク広報委員会  
〒753-0074 山口市中央二丁目5番1号(山口市民会館事務所2階)  
TEL/FAX 083-934-2841 <http://www.y-djc.com/> [✉mw3kaku@c-able.ne.jp](mailto:mw3kaku@c-able.ne.jp)

## 国の動き

### 地域における女性の活躍の現状について

安倍内閣においては、女性の活躍推進が成長戦略の中核として位置けられており、各地域においても経済活性化、地域活性化の観点から女性の活躍をどのように推進していくかが、課題になっています。ここでは、主に都道府県データからみた地域における女性の活躍の現状について紹介します。

#### ・地域における女性の活躍の現状

女性の活躍について、わが国全体では、二つの課題があげられています。第一に、労働力率が30～40歳代前半を谷とした「M字カーブ」を描いている。第二に企業等における役員や管理職に占める女性割合が低水準であるということです。

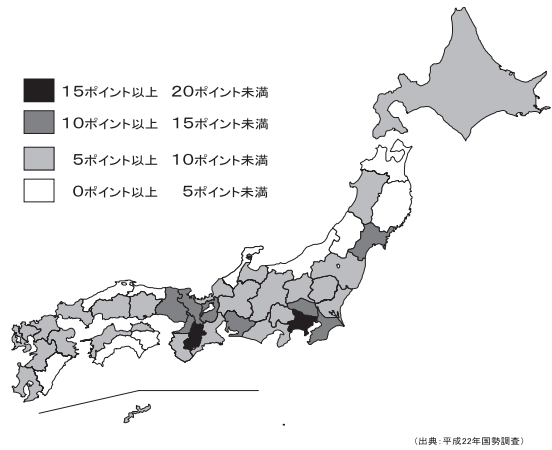
#### ・都道府県別M字カーブの深さ

各都道府県のM字カーブの深さは、結婚、出産、子育て期に女性が離職している程度を示しています。最も浅いのは高知県(2.5ポイント)で、島根県(3.5ポイント)がこれに続きます。最も深いのが神奈川県(18.0ポイント)を筆頭に奈良県(16.8ポイント)、東京都(15.6ポイント)千葉県、大阪府、埼玉県と続き兵庫県(13.7ポイント)と大都市とその周辺地域となっています。

#### ・都道府県別女性の管理職比率

最も高いのは徳島県(15.3%)、ついで東京都(14.8%)。最も低いのが福井県・富山県(9.5%)で、北陸・中部地方に割合が低い地域が目立ちます。

図表1 M字の深さ(都道府県別)



(出典:平成22年国勢調査)

(備考) 全国知事会「女性活躍の場の拡大による経済活性化のための提言」(平成24年7月)

#### ・M字の深さと管理職比率の関係

女性の継続就労と管理職比率には相関関係はないと考えられ、地域的特性が影響していると考えられます。

全国平均よりM字カーブが浅く、管理職比率が高いのは、高知県、徳島県、青森県。M字カーブが深いものの、管理職比率の高いのが東京都、京都府、大阪府等大都市圏。M字カーブが深く、管理職比率も低いのが神奈川県、奈良県、千葉県等大都市圏の周辺部。M字が浅い一方で管理職率が低いのが福井県、石川県、富山県等の北陸地域です。

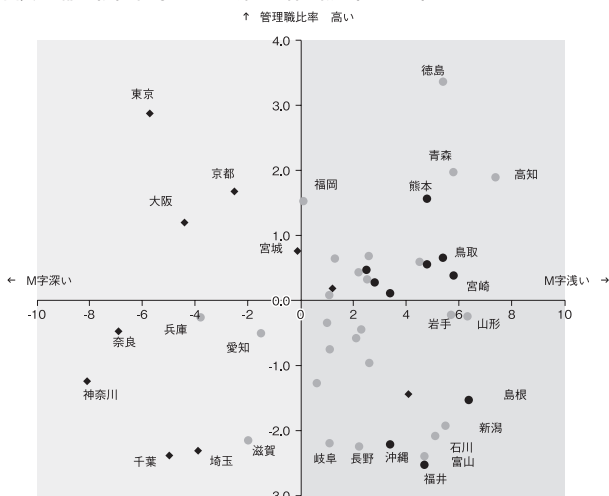
#### ・雇用形態別に見た正規雇用、非正規雇用

高知県では、正規雇用の割合が25～34歳から45～55歳まではほぼ横ばいで推移し、また山形県、福井県、徳島県といったM字カーブが浅い県においても、正規雇用の減少が緩やかで就業継続している女性が多いとみられます。一方で、M字の深い東京都、神奈川県、大阪府、奈良県については、正規雇用が25歳以降、全国以上に低下しています。

また、東京都については、非正規雇用の割合が神奈川県や大阪府に比べて低く、正規職員を離職後、再就職しない女性の割合が他地域より高いと考えられます。

このように、各都道府県によって、女性活躍推進を巡る状況は異なります。これは、地域の産業状況、雇用動向、住民の意識、さらに行政の取組み等が反映されていると考えられます。地域における女性活躍推進にあたっては、地域各々が自らの女性活躍の現状を把握した上で、適切な施策推進をしていくことが必要とされます。

図表3 都道府県別M字カーブの深さ、管理職比率、出生率



(備考)  
1. 男女共同参画会議基本問題・影響調査専門調査会資料による。  
2. 縦軸は「全国平均のM字カーブの深さ-各都道府県のM字カーブの深さ」、横軸は「各都道府県の管理職比率-全国平均の管理職比率」。●は合計特殊出生率上位10都道府県、◆は下位10都道府県。  
3. データ出所は、①M字のカーブの深さは、全国知事会提言(平成24年7月)、②管理職比率は、独立行政法人国立女性教育会館「男女共同参画統計データブック2012」(平成17年の国勢調査の「管理職従事者」のデータを集計)、③合計特殊出生率は、厚生労働省「人口動態統計」(2011)による。

## 山口市男女共同参画センターフェスティバル

台風 27 号による影響が懸念されながらも、平成 25 年 10 月 26 日（土）に第 5 回山口市男女共同参画センターフェスティバルが開催され、約 600 人の方々がいらしてくださいました。

山口市男女共同参画センター内では、センター登録団体活動発表、ワークショップ「もっと知りたい中国文化」及び「タイ舞踊」が行われました。

山口市民会館内では、大ホールにて平野レミ氏の講演会を開催するとともに、小ホールにおいてワークショップ「観て、感じて、楽しもう ジャグリングに挑戦！」、展示ホールにて山口市男女共同参画ネットワーク団体会員、センター登録団体による活動紹介を行いました。

また中庭では、各地区女性団体連絡協議会のご協力

による特産物、障害者施設「鳴滝園」のパン、おにぎりの販売コーナー、また山口市食生活推進協議会阿東支部関係者のご協力によるしっちゃん鍋や、ぜんざいの試食コーナーを設けましたが、あっという間に完売、完食となりました。

ワークショップから会場を変えての中庭でのジャグリング公演では様々な妙技に大きな歓声があがり、恒例の「家族でファッションコンテスト」ではお国の民族衣装を身に付けた留学生を含む家族 13 組のご参加で華やぎました。

お陰様で、天候の面では気がかりな一日とはなりましたが、大盛況のうちにフェスティバルを終えることができ、ご協力、ご参加いただいた方々に感謝申し上げます。



### 講演「胸にはエプロン、口にはシャンソン」

講師：料理愛好家、シャンソン歌手 平野レミ氏

こんにちは。私は九州で 7 年間番組をやらせていただいてたんですが、ずっと来たかった山口にこういう形で来ることができて嬉しいです。

今日は「男女共同参画」というのがテーマですが、日本は男女平等指数ランキングが 136 位

国の中で前年度 101 位、今年は 105 位だそうです。料理の世界でも男の人がもてはやされているし、どこでそんな差が出ているのかと思いますが、本当に男の人と女の人が仲良く一緒に頑張ってほしいと思います。うちは夫がゴミ出し、食器洗いをするし、息子の幼稚園の送り迎えをしてくれることもありました。私がサンキューなんて言うと、「そんなこと言うことはないよ。一つの家で一つの単位だから、家庭の中で誰が何をやろうと勝手だよ」と言う人で、

私はとっても良い夫と結婚したなと思っています。

私は料理をやっていますけれど、料理学校には行っていません。もともと料理が好きで、小学校の時に学校から帰って、採って食べた自家菜園のトマトがすごくおいしくて、これで何かできないかなと考へて、そこにあったうどんにトマトとチーズを入れてグラタンにしたんです。それがおいしくておいしくて！何もないところから自分の考へ一つで創造できるものが料理、そして良い匂い、良い音、見た目の楽しさと五感を楽しませてくれる料理っていいなと目覚めてしまったのです。それからやみつきになっています。一つのことを一生懸命にやることでますます磨きがかかってそれが好きになる、大好きなことをやるということが結局は勉強だなと思って、シャンソンを歌っているときでも料理をやるようになったんです。

結婚した時に夫が最初に言ったのは「レミの料理をあと何千回食べられるかな」という言葉でした。「そんなもんじゃない、何十万回でしょう」と言ったけど、本当は何万回もなくて意外と少ないのですよ。私はこの人は食べることに命をかけているのだと思って「よっしゃ！頑張っちゃう」といろいろなことをやるようになりました。

夫がデザイナーでイラストレーターなので、テレビに出ている人やいろいろな人達がうちに来ます。「みんな家庭料理が大好きだから」って夫が言うものだから冷蔵庫の中にあるもので簡単な料理を作っていました。その中の一人でネスカフェのCMソングを作った八木正生さんという人が、すごいグルメで食についてのエッセイを本に書いておられて、私にエッセイを書くのをバトンタッチして来たんです。何回もお断りしたあげく1回きりということで引き受けて、人が来た時に作る簡単な料理を20～30品書いたら、それが売れて雑誌社がこういう料理本を書いてくださいと言ってきました。きっかけを作ってくれた八木さんに「あれを断らなくてよかったですよ、こんな楽しい人生が開けてくるとは。本当にありがとう」って電話でお礼を言いました。八木さんは亡くなりましたが、CMが流れてくるとありがとうという気持ちになってしまいます。そんなわけで私は、待っていても何もやってこない、誰かが何か言ってくれたら自分から動き出さなきゃという気持ちがないと何事もないんじゃないかなと思っています。

—ここからスライドと共に—

私はお爺さんがフランス系アメリカ人なので外国に親戚がいるんですが、そのついでメキシコで寿司屋をやっている人に日本食のてほどきをしに行きました。私が行った後は行列ができています。日本食は無形文化遺産に登録されるそうだから、これからどんどん栄えますよ。

我が家のキッチンです。食器棚の扉やカーテンなど様々なところに、私が良いと思ったことが取り入れられています。

料理の話に移りますが、白菜やパンで作る食べられるクリスマスツリー、クリスマス料理、食卓の演出、牛乳パックで作るちらし寿司やデザート、ペットボトルを容器にしたゼリーなどをご紹介します。ほかに廃物利用のボタンやアクセサリーで作った額や、ワインの栓で作った鉢カバーもあります。短くなった色鉛筆、煮干しや唐辛子や豆、箸置きに市販のパーツを付けてブローチやイヤリングも作りました。

私には孫ができたんですが、こんなに小さくても何もわからないだろうと思わないで、ちゃんとママやパパと同じものを嗅いで、同じものを食べることが絶対必要で、それが食育の原点だと思うのです。この「ドレミの子守唄」という本は私が読売新聞に37～8年前に長男の妊娠から出産まで連載していたのを1冊にまとめたものです。長男は音楽をやっていてあちこちで活躍しているので、本が出ても構わないかどうか聞いたら、「いいよ、いいよ」とあとがきまで書いてくれました。私はちょっと変わったお母さんだったみたいで、保護者参観で音楽の時間に一人で踊ったりしてみんなに「すげえな」と笑われて嫌だと思っていたようです。でもこれを読んで、「お母さんのことを『これ以上ない母親だったのに』」と思った」と聞いて、私は子どもを産んでこんなに嬉しかったことはないなと思いました。これを書いていなかったら、私のことを一生変な母親だと思っていたでしょう。

私の料理はもともと簡単なものです。簡単でおいしいものばかり考へています。毎日毎日料理をして、一食一食が大事で、そうして身体の中に入ったものが5年後10年後にこうして身体から出てくると思います。だから一食一食をまじめに作らないと健康にはよくないと思うのです。うちの夫は結婚して40年間一度も風邪をひいたことがないし、会社を休んだり寝込んだこともありません。皆食べ物じゃないかと言ってますが、良い食べ物をとることが大事です。

自分でちょっと調子が悪いと思ったら、自分から高い声を出してテンションをあげないといけないと思ってとりあえず笑っちゃうんです。本当に笑顔というのは人を幸せにする最大の武器じゃないかと思って何もなくても笑うのです。心の持ちようで「笑う門には福来たる」というのは本当です。



## 親子でパン作り

8月29日(木)カリエンテ山口において、徳永豊氏を講師にお迎えして、親子でパン作りを行いました。大人と子どもあわせて24名の参加がありました。

初めに講師の自己紹介があり、パン作りに使う県内産の「ニシノカオリ」と言う小麦粉に巡り合うまでの御苦労話があり、今後もパン作りに適した小麦粉作りに努力していきたいとおっしゃっていました。

早速、材料の計量から始まり、生地を捏ね、ベンチタイムで寝かせて、ガス抜きをした後に形成、又ベンチタイムを取りフライパンで焼くという工程を経てパンが出来上がりました。もう1つは、同じ手順でピザの生地を作り、丸く伸ばしているいろな

材料をトッピングしてオープンで焼きあげました。

子供たちは顔に小麦粉をつけながら、一生懸命にパンを捏ね、自分の手づくりのパンに「とても、おいしい」と満面の笑顔を見せていました。

今回の教室は、楽しく手軽にパンが作れる良さと、将来自立した時に料理に親んでもらえるようにとの思いを込めて開催しました。



## 英語で俳句を楽しもう

6月18日(火)小郡地域交流センターにおいて、講師にアメリカ出身で山口市内にお住まいのZally Barnes(ザリーバーンス)さんをお招きして英語で俳句を作りました。

まず俳句のポイントはaeiou(Y)を一音として、5.7.5を作ります。季語は使わず自由です。

例文として、An old silent pond, A frog jump into pond, Splash silna again(古池や蛙飛び込む水の音)

まず、参加者それぞれが俳句にチャレンジ致しました。そして、ゲストとしてこられた山口在住の4人の外国人の方に国の紹介をしていただきました。

スペイン・マドリッド出身のホルヘ・ガルエ(Jorge Galue)さん「スペインにも俳句の同好会が3団体ある。日本との俳句交流をしたいと日本の俳句をスペイン語に翻訳している」

アメリカ・バージニア出身のキラ・アダムス(Kira Adams)さん「俳句はアメリカで小学3年から習って来た。」

アメリカ・フィラデルフィア出身のノア・マッキ

ンカス(Noah Macinskas)さん「俳句はアメリカで小学校から習っていた。日本の四季は大好きです。」

ジャマイカ・キングストン出身のアントニア・パウエル(Antonia Powell)さん「ジャマイカは一年中夏で日本の四季は大好きだ。俳句はアメリカの大学で初めて知った。ジャマイカでは日本の文化生け花が有名である。」

アメリカ・ヨーロッパでは現在日本の文化、特にアニメが有名であると同時に日本の文化に皆さんが興味を持っている。俳句は文章が短くかんたん。しかも他の国とは違っている事。形式に囚われないで創作できる簡単さにみなさんが惹かれているとの事でした。

日本人として、再認識しなければと参加者全員が感じました。



### おんなの目 おとこの目

「赤は女子の色だと思っていた。」地元山口高校出身の直木賞作家重松清氏が上梓した「赤ヘル1975」の冒頭の一文だ。

1975年、この年広島カーブはチームカラーを紺から赤に変えた。当初、ファンの子供は赤

い帽子を被るのに恥ずかしさやためらいがあったことが本作でも語られている。

しかし、この年万年Bクラスだったカーブが快進撃を続け、ついにはセ・リーグ制覇をする。チームは「赤ヘル軍団」と呼ばれ、赤色が強い者の象徴となっていく。

それまでの日本は、色で男女を区別する習慣がまだまだ残っ

ていた。今はこの球場に行ってもカーブを応援する人は男女の区別なく赤を着ている。そのことが何の違和感もなく受け入れられているが、そのきっかけになったのは1975年のこのことであることは言うまでもない。

あの年、もし弱いカーブのままだったら色で男女を区別する時代がまだまだ続いていたかもしれない。